秋田3年ぶり花園へ

全国高校ラグビー 県予選 〈最終日〉

第86回全国高校ラグビー大会県予選最終日は24日、秋田市の八橋球技場で決勝を行い、秋田が17－0で秋田工を下し、3年ぶり6度目の優勝を飾った。秋田は劣勢が予想されたFW戦で踏ん張り、前半、トライ（ゴール）とPGで10点をリード。後半も終了間際にダメ押しトライ（ゴール）を奪った。秋田は12月27日に東大阪市の花園ラグビー場で開幕する全国大会の出場権を手にした。

FW抑え秋工を完封

▽決勝

秋田 17（10－0 7－0）0 秋田工

▽30分ハーフ▽キックオフ＝秋田▽レフェリー＝岸川

秋田工	0	0	0	0	0
秋田	1	1	1	1	10

TGP前　TGP後　計反

0　0　0　0　14

1　1　0　7　17

秋田FW陣がタックル、モール突進と攻守にわたって奮闘。秋田工を完封で下し、3年ぶり6度目の優勝を飾った。

秋田は前半14分、ゴール手前のラインアウトからモールを押し込み、先制トライ（ゴール）。同19分にはPGでリードを広げた。後半は自陣での展開が続いたが、FW戦を挑む秋田工のサイド攻撃をタックルで確実に封じ、無得点に抑えた。

秋田工はFWで優位に立てなかったことに加え、ゴール前での反則、セットプレーのミスが響き、決定力を欠いた。

「借り返せず悔しい」

○…6月の全県総体決勝と同じ顔合わせとなった頂上決戦。「自分たちのミスが多かったのが敗因。総体で負けた借りを返したかったのに、悔しい」。3連覇を阻まれた秋田工の夏井大輔主将（3年）は試合後、ガックリと肩を落とした。

得意のモールで何度もゴール前まで押し込みながら、秋田の堅守と自軍のミスで、一度もトライを奪うことができなかった。流れに乗り切れず、自陣で反則を連発。秋田に先制を許した場面も、自陣ゴール前での反則が原因だった。

「きちんとボールを取るところで取れなかった。相手はチャンスをきっちりものにした。そこに差が出た」と厳しい表情で振り返った柴田久寛監督。だが最後のミーティングでは「全国大会に連れて行ってやれなくて申し訳ない」と、つらい練習を重ねてきた選手たちと一緒に涙を流した。

この言葉に「レギュラーの半数は2年生。この現実をしっかり見て来年に生かしてほしい」と夏井主将。全国の舞台で活躍する夢は、後輩たちに託された。

安藤陽が3ゴール

○…秋田のSO安藤陽（3年）がPGを含む3本のゴールに成功。キックでもそつなくゲームメークをこなし、「少しミスもあったが、冷静にプレーできた」と笑顔を見せた。

安藤は準決勝の男鹿工戦後半、キック判断のミスからゲームをうまくコントロールできず、試合後は表情を曇らせた。しかしこの日は前後半を通じて要所でタッチキックを決め、「敵陣にうまくボールを運ぶことができた。男鹿工戦よりも良かった」と振り返った。

次は念願の花園でのプレー。「シード校に勝ちたい」。秋田の展開ラグビーを支える司令塔が夢舞台での奮闘を誓った。

【決勝・秋田－秋田工】後半29分、秋田FL鈴木が左中間にトライ＝秋田市八橋球技場

3年ぶり6度目の優勝 秋田チーム

柿崎	秋田工	伊藤	東
郡司	秋田	小佐後	野亮
田口	田	藤	藤
藤原	工	後藤	達
工藤		佐藤	井
鈴木	FW	松	玉
柴田		小	橋
出雲		高	良
小野	HB	奈	原
安藤		菅	藤
江畑	TB	近	峨
近藤		嵯	辺
吉田		川	田
金谷		鎌	井
斎藤	FB	夏	

タックル 2人がかり

堅守 光る

栄光

堅守。この一言に尽きた。秋田工がゴール前で手痛い反則を犯していたとはいえ、攻撃の起点となる相手FWを押さえ込み、完封勝ちで花園切符を手にした。「FWの頑張りとディフェンスが勝因」。近藤周平監督の言葉に力がこもった。

前半14分、相手反則からマイボールラインアウトを奪取。モールで一気に押し込み先制トライを決めた。同19分にも反則で得たPGを決め、3点を追加。理想的な展開で前半のゲームを進めた。

後半、自陣での試合を強いられる我慢の時間が続く中、秋田ディフェンスの真骨頂は発揮された。モール、ラックからのサイド攻撃を試みる秋田工選手を、2人がかりのタックルで確実に阻止。ゲインライン突破を許さなかったことが、無失点勝利につながった。

「1人で足りなければ2人でタックルしないといけない」（吉田建雄主将＝3年）。その必要性を実感したのは、5月の中央地区総体準決勝・秋田中央戦。突進する相手と1対1の勝負を挑み、じりじりとゲインラインを割られて敗れた。

この1敗を機にチームは「ダブルタックル」の練習に取り組み始めた。この半年間、2人が相手の足元と上半身に飛び掛かる練習にこだわってきた。その集大成となる勝利に、FWリーダーの柿崎寿直（3年）は「これまでやってきたことが実ったった」と充実感をにじませた。

秋田の現在の部員数はわずか26人。15対15の実戦練習はできない。だがベンチで声を張り上げるリザーブ、実際にグラウンドで戦う選手は間違いなく、一緒に戦っていた。少ない部員が一枚岩となっての優勝に、近藤監督は今大会初めてチームを褒めた。「この26人を誇りに思う」

優勝した秋田チーム